



## 津下統一郎元理事 ご夫妻に聞く

## 回想の父と同志社

聞き手

河野 仁 昭

父・紋太郎のこと

——いいお住いですねえ、高台の中腹で。

津下 戦後でもない時からずっとここでね。木が大きくなって庭からでは見にくくなりましたが、玉川学園が見えるのです。

——向いの丘？

津下 いいえ、左の方です。私も理事をやっていましたがね、幼稚園から大学まで合せて約一万人の学園ですが、小原国芳先生が「教育は自然に恵まれた静かな丘陵地帯でおこなうべきだ」というお考えでこへもってこられた、精神主義のすばらしい学校です。

——玉川学園についてはまた後でお話しようかと思いますが、お父さんの紋太郎さんは初期の同志社の卒業生（明治二十三年普通科、同二十六年神学科卒業）ですね。岡山のご出身で。

津下 父の経歴につきましてはこの本（『津下紋太郎自伝』）にありますように、出生地は岡山の天城というところです。今は倉敷市に編入されています。

——明治十八年に同志社へ入学される前に、岡山で金森通倫から洗礼を受けていますね。

津下 亀山昇（明治十七年神学科卒業）が同志社から伝道に来て、その感化を受けたんですね、自伝に書いていることです。

——お父さんが同志社へ入学されるのは、お家の方々のキリスト教に対するご理解と支持があつてのようで、当時としては珍しいことですね。同じ岡山の大吉もそうでしたが。

ところで、お父さんの在学中に新島襄が亡くなりますが、新島についてお父さんは何かいわれませんでしたか。

津下 新島先生の話はあまりしなかったように思いますが、普通科を卒業して神学科に進みしたのは、新島先生の遺志を継いで伝道をしなくてはならんのだと考えたからなのでしょう。

——なるほどね。

津下 父が話をしていた同志社の先生のことでは、ラーネッド先生のことか記憶に残っています。父の生涯の座右の銘は「バ



津下統一郎氏

イブル・アンド・エコノミー」でしたが、父はこの言葉をラーネッド先生に教えられて、これを生活信条にしていたようです。その言葉とお名前をご自身で書かれたラーネッド先生の写真が家に飾ってありました。だから「イブル・アンド・エコノミー」という言葉は、私の頭にもこびりついています。

——津下さんもラーネッドの教えを受けたわけではありませんか。

津下 マントを着て歩いている姿を見掛けるといったことはありませんが、もうご高齢だったから、教えてはいませんでした。

——そうそう、新島先生の二度目の外遊のときスイスで病気になるれて、そのとき心に浮かんできたのが先ず奥さんのこと、そして第

二が同志社のことであったと帰国して話されて、奥さんのことを先ず心配したというところに父はびつくりして、感動しちやたらしいんだ。(笑)

——やっぱりキリスト教徒はちがうと。

(笑)

津下 まあ、そういうことでしょうか、そのころのことだから。

——神学科を卒業されて同志社普通学校の先生に就任なさいますね。

津下 同志社から頼まれたのでしよう。父は生涯、とても同志社思いでした。

——五年間つとめられて、明治三十一年六月に退職されていますが、そのころ、アメリカン・ボードとの対立で小崎社長が更迭されたり、浮田和民、柏木義円、安部磯雄といった先生たちが辞めていく、そこへもつてきて横井社長の「同志社綱領」削除事件が加わるといったことがあったので、私はそうした紛糾があつて教員を辞められたのかと思つていたので、そうではなかつたようですね。

津下 父が書いているものを見ると、そうではなくて、実業界で仕事があった

ようです。辞めてから全国あちこちまわつたとき、校友に会うと母校の問題についての情報や意見を交換したことが日記に出てきますから、心配してはいたようです。

——その日記の明治三十一年九月、つまり同志社を辞めて全国を視察に歩いたときのもので、伝記の巻末に添えられています。その冒頭に、

「方今天下多事志士ノ事ヲ為スベキ好時期ナリ、豈碌々トシテ学校教員ヲ以テ甘んズベキノ時ナランヤ、余が同志社教員ヲ辞シ身ヲ実業界ニ投ゼント欲スルヤ久シ、然ルニ二三年來校務多端ニシテ余が学校ヲ去ルヲ容サズ又去ルニ忍ビズ以テ今年ニ至レリ」

と書かれています。日清戦争直後の明治の青年だなアと思つて。(笑)

津下 浮田さんや柏木さんなどの話はよく聞きましたが、辞めた理由は聞いたことがなかつたですね。

満寿子夫人 三宅驥一さんのお名前もよく出ていましたね。

津下 そうそう。まあ、実業家になりたかつたんでしよう。同志社で同級だった土



父・紋太郎

倉龍次郎さんの兄さんである鶴松さんから、台湾で事業をやらないかと誘われて、まず日本国内を漫遊して国内事情を調査した上で台湾へ渡ったわけです。

——土倉家は大和の山林王で、台湾でも植林事業をやったようですね。それと水力電気。お父さんは明治四十年まで総支配人として事業にたずさわったあと日本に帰って、新潟で石油業につかれ、その後ずっと石油関係の会社の経営を中心に事業をなさった。実業家として成功された同志社出身のお一人ですが、台湾から帰られてのちは土倉家とおつきあいはなかったんですか。

津下 いえいえ、父も土倉龍次郎さんも東京に住むようになったものだから、ずつ

と親しくしていました。

夫人 土倉さんは東京で花をつくっておられましてね、カーネーションなどとても有名でございました、全国へ出荷して……。

津下 父は台湾から帰って、しばらく京都でたばこの村井吉兵衛さんの仕事を手伝っていた。その村井さんが石油会社の株を持っていたことから石油の仕事をするようになったわけです。台湾時代の親しい友だちにはもう一人、長尾半平という方がいました。

夫人 後藤新平さんのお弟子さんだったかしら？

津下 弟子というわけではないけれども、後藤さんが総督時代に総督府におられて、親しい関係にはあったようだな。クリスチャンで、禁酒の親玉だった。この長尾家、土倉家、そして津下家が東京でも親しくしていて、一品会というのをつくって各家もちまわりの夕食会をやっておりました。一品ずつ持ち寄るわけです。

夫人 そのおつきあいがずっと続いていて、ましてね、私たちは二代目ですけれども、息子や娘たち三代目もつきあっています。

——親子三代だと親戚みたいなものですね。大和の土倉家はどうなっただんでしょう。

津下 大和のほうは具合がわるくなったようです。父もそう書いている。しかし、土倉龍次郎さんの息子さんはカルピスの社長になったですよ。

夫人 土倉龍次郎さんと父の紋太郎がくった会社なんですね。

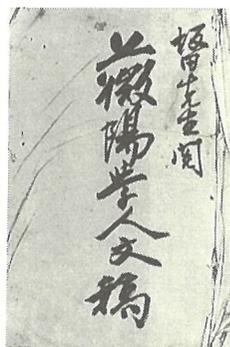
——お父さんは石油会社ではなかったんですか。

津下 日本石油時代に金を出して、土倉さんとカルピス製造株式会社をつくったのです。あのカルピスというのは、蒙古へ行っていた三島海雲という人が素になるものを持ち帰ったものです。蒙古人がそれを食べて長生きしている、これは日本人が食べてもいいはずだと。ヨーグルトみたいなものだったのです。

——持ち帰ったものは？

津下 そうそう。それを日本で作って「醍醐味」という名前です。酒の銘柄あまり売れなかった。

——「醍醐味」は変ですね。酒の銘柄みたいだ。(笑)



父紋太郎が学生時代に記した自筆文集の表紙

津下 それでキャラメルをつくって、「ラクトーキャラメル」という名前で売り出した。これは売れたんです、私も食べたことがある。そのあとカルピスを製造することになったわけです。

——お父さんがカルピスを作り始めた方とは存じませんでした。

夫人 カルピスの会社は、いまだに津下家のことを覚えて下さっていますね、大変よくして下さいます。

——お父さんはその他に、鶴見臨海鉄道とかニューヒューム鋼管とかコンクリート会社とかの経営にも当たられて、昭和十二年九月二十日、六十八歳でなくなられますね、同志社の理事もなさって、日中戦争を日本が始めた年だから、まア、いい時期に亡くなられたという感じはしますけれど

……。

#### 父・紋太郎の人柄

——ところで、お父さんはどういう人柄だったのでしょうか。明治二十年に創刊された『同志社文学』にはときおり寄稿なさっていて、文筆をよくする方であったということでしょうかええますか。

津下 これは父が普通科に在学したときに書いた論文のようなものを綴じたものですが、『薇陽学人文稿』と表紙に書いています。薇陽というのは父の号なんです。

——十代の終わりですね。自筆ですか、きれいに書かれていますね。

津下 同志社大学の仲村研先生にお見せしたら、「当時の生徒の生活や思想がうかがえる貴重なものだ」と言われて、これ（仲村研『薇陽学人文稿』について）、「キリスト教社会問題研究」第三七号、一九八九年三月、所収）を書いて下さったのです。

——そうですか。仲村先生も亡くなられて。

津下 亡くなられた？

——はい、ご存知なかったですか。

津下 知りませんでした。

——今年（一九九〇年）の三月です。お父さんは字もお上手ですねえ。

津下 書は好きで、頼まれてはよく書いていました。その一部は自伝に写真で載せておきました。

夫人 それからねえ、豪傑でございましたよ、本当に立派な男性でした。

——息子さんの奥さんが言われるのだから間違いない。（笑）

夫人 私の父（大沢徳太郎）が同志社英学校で、津下の父と寮で同室だったの。

——おやおや？

夫人 大沢の方が後輩なんですよ、先輩と同室にさせられて。

——当時はそうだったみたいですね、寮生活や学校のことを指導してもらったために。

夫人 だから二人は生涯親しくて、家へもしよつちゅう遊びに来て。そんなことで私は小さいときからよく知っています、「おじさま」「おじさま」と呼びしていました。

——ご結婚される因縁があったわけですね。(笑)

夫人 津下の父が「統一郎の嫁にならんか」って勧めたものだから(笑)。小さいときからすごく可愛がってもらいました。父は立派な哲学をもっていましたし、それで



西寮玄関前にて、前列中央津下氏  
(大正12、13年頃、西寮第十寮寮長時代)

いて人づきあいはよく、とても朗らかで、太陽のように暖かい人でございました。

——息子のお嫁さんにほめちぎられたら最高だ。(笑)

津下 私が言うのもなんだが、春風駭蕩、豪放磊落という感じの人間でした。家でも怒った顔を見たことがなかった。「お前、こんなことしちや駄目じゃないか」という言い方はしない、やわらかく諄々と説き聞かせるのです。だから家内なども、父を非常に尊敬していましたね。人の過失をせめるといったことはなかった。日本ゴム工業に関係していたとき、その会社の役員かなにかが公金を不正に使って穴を開けたことがあるのです。それでも本人を責めないで、父が責任を一人でかぶって後始末をしたことを覚えています。

——新島先生の自責打掌の精神ですね。  
津下 そうそう、そう思います。

#### 同志社大学の寮生活

——お話をうかがってきて想像がつくん

ですが、津下さんはお父さんに勧められて同志社へ入られたんでしょう。

津下 まあ、そういうことです。父は同志社に心酔していましたから。

——お生まれはどこですか。

津下 台湾です(明治三十六年八月二十一日生まれ)。父が日本へ帰って二三年後に、あとで日本石油と合併する新潟の宝田石油につとめましたので、小学校一年の二期から六年の二期期まで新潟県長岡の表町小学校に学びました。その後は東京で。

——中学から同志社へ？

津下 いや、東京の京華中学です。そこに四年間学んで同志社へ入学しました。

——大学予科ですね。何年ですか。

津下 大正九年です。

——すると大学令による同志社大学になったところですね。法学部経済学科でしたね。

津下 そうです。

——同志社では寮ですか。

津下 ずっと寮でした。旧図書館(啓明館)の裏に東寮というのがあって、そこに三、四、七、と三つの寮があって、予科時

代はそこでした。本科になってからは西寮、いまもあるかな、烏丸通りを西へ入ったところだった。

——もうごさいません。神学寮があったんでしよう。

津下 神学寮第十寮。私たちはその第十寮へ入った。都合六年、寮生活をしたわけです。

——初期の同志社は全寮制といつてもよい状態でしたわねえ、お父さんの時代……。寮生活から得るところのものが実に多かったですですが、大正末期はどうでしたか。

津下 父の自伝に、一つのバケツを洗面にも洗濯にも雑巾をすすぐにも使ったと書いてありますが、私たちの時代も似たようなものでした。

——でも、水道はあったでしょう。

津下 いや、なかったように思う。ガツチャン、ガツチャン、ポンプで水を汲んで使った覚えがあるから。

——じゃア、お風呂は？

津下 銭湯ですよ。烏丸通りから少し西へ行った所にありますね。

——例のバケツを下げて行くんですか。

津下 いや、銭湯に備えつけがあったから。(笑)

——食事は寮の食堂か何かで……。

津下 風呂も食堂も寮にはなかった。だからチャペルの向い側あたりにあった食堂へ食べに行きました。わりに大きい建物でした。

——明德館が建っているあたりでしょうね。門限とか起床・就寝時間はどうだったですか、お父さんのところは厳格だったようですが。

津下 時間も決っていなくて、すべて自由でした。楽しかったですよ、いい思い出だ。

——不便だったでしょうに。

津下 不便といえば不便です、今日に比べたら。暖房だって火鉢一つでね、自分で火をおこして、股火鉢で、マントをかぶって勉強したものだ。

——炭は自分のものを？

津下 自分で買って置いていました。自炊だったので来たんですよ。あるとき自炊していたら大沢のお母さんがやってきてね。

夫人 武間の姉(富貴)とか。

津下 姉さんも来たんだったか。組板なんてものはないから下駄の上で物を切っていたら、びっくりりしちゃって。(笑)

——びっくりりしない方がどうかしてますよ。(笑)

津下 そういう風習のようなものが、父のころから連綿と続いていたわけだ。だから余り変っていなかったと思うし、古い建物でね、実によかったですよ。

——同志社の寮は熊本から来た人たちの影響で、質素でバンカラだったようですが、その伝統があったわけでしょうか。

津下 バンカラとは言いがたくなっているように思うがね。

### グリークラブ

——グリークラブに入っておられたようですね。

津下 五年先輩に高井(伊達)能君というのがいて、東寮で同室だったんだが、彼がグリーに入って、私にも勧めるものだから入りましてね、ずうっとグリークラブのメンバーでした。寮とグリーが私の同志

社時代のすべてかも知れん。(笑)

——部員は何人ぐらい？

津下 五、六十人はいたでしょう。ラン

チ・タイムに神字館(現クランク記念館)

の二階にあった講堂で、毎日練習しました。

——何かの団体に入って学生生活を送る

というのはいいですね。

津下 そう思いますね。三、四年先輩の

山口隆俊、同級の鈴木重敏、いま神戸にい

る原忠明、そして私と四人でカルテットを

つくりまして、休みには日本内地はもちろ

ん朝鮮、台湾、当時の満州、中国まで演奏

旅行をしましてね、なかなか有名だったで

すよ。

——四人でね。グリークラブ全体で外地

まで行くことはなかったですか。

津下 一度、台湾へ行ったかな。

——四人でも旅費などが大変でしょう

に。

津下 各地の先輩にあらかじめ連絡をと

って出掛けるわけです。すると、今のよ

うに金がかからないからでもあるけれど

も、先輩が費用を負担してくれてね。満州

なんかだと、私の叔父が満鉄の総裁をして

いたから、満鉄が全部金を出してくれた。汽車賃もただだからあちこちで演奏会をやりました。

北京では清水安三先生が学校をやっていたものだから、いろいろご厄介になって、上海まで演奏旅行をしたんだが、金が余っちゃった。(笑)

——好きなことをしながら、そんな外国

旅行ができるなんて羨ましい(笑)。しかも

人々に感謝されて。グリークラブのOBの

おつきあいもあるでしょうね、在学中いつ

しよにやっていたんだから。

津下 就職してニューヨークにいたとき

などはそうでもなかったが、日本に帰って、

ことに第二次大戦後はね、OBの交流が始

まって、方々にクローバー・クラブが出来

た。

——グリーのOBの？

津下 そうです。そして皆でいっしょに

台湾とかハワイあたりまで演奏旅行をや

ましてね。古い卒業生がいるものだから、

各地で大歓迎です。

——台湾などにもいますか。

津下 いまいう留学生として同志社へ来

ていた台湾の人などがいるんです。そういう人たちは私たちが行く喜びましてね、母校との縁が切れそうだったのと言ってますね。

ハワイなどは、むこうの大学と同志社が姉姉校だから合同演奏会をやりましたり

ね。卒業生もたくさんいることだし。

夫人 同志社の校歌は英語だから、英語

圏の方たちによくわかるんですよ。神を讃

え、人類愛を歌う歌詞が感動を与えました。

津下 演奏旅行といっても、私たちはた

だ楽しむだけではなくて、その土地の校友、

同窓、その土地の人たちに、同志社スピリ

ット、同志社精神を伝え、またそういった

ものを涵養していただくことに役立ちたい

と思っているのです。お役にたっていると

思いますよ。

——それはおっしゃるとおりだと思います。

### 洛陽教会のこと

——奥さんもグリークラブとかかわりが  
おありだったんですか。



満寿子夫人

夫人 いいえ、若いときにはなにも。

津下 家内は洛陽教会のクワイアですよ。そのオルガンを引いていた。私が讚美歌の指導をして。

——津下さんも洛陽教会に？

津下 神学科時代でしょうが父がよく伝道に行っていたのです。そんな関係で私も同志社へ入ってからはずっと通っています。そして日曜学校で教えたり——。

夫人 私も日曜学校の先生をしていますね。武間の姉やら、一番上の前田の姉なども私たちより前にしていました。

——じゃア、日曜日ごとに津下さんといっしょになって。

津下 私たちが初めて洛陽教会のクワイ

アをつくったのです、歌の指導に行つて。

——お父さんの自伝では、第三高等学校の生徒たちがあの教会を創ったというか、熱心だったようですね。私は大沢家あたりが中心になって育てられたのかと思っていました。

夫人 大沢の者たちも一生懸命やりましたけど、三高の生徒さんも来ていました。小原国芳先生なども。

——玉川学園を創られた？

夫人 そう、京都大学に籍を置いておられたところですけれども。

津下 小原先生は広島高等師範学校を卒業して、しばらくどこかで教えておられたんだ。それから京大へ。

夫人 哲学科に籍を置かれて、西田幾多郎先生の哲学を勉強なさっていたのです。洛陽教会へ来られて、日曜学校の先生をしていらした。そのころ私は生徒でしたの。

——そうですか。その小原先生の玉川学園のお近くに生まれて、学園にも関係なさっているというのはなにかの因縁みたいですね。

### 同志社大学の先生たち

——少しは大学の先生たちのこともお聞きしておかねばなりません(笑)。津下さんが入学された年に海老名弾正が総長に就任されたのですから海老名時代の同志社に学ばれたわけですが、海老名先生について何か。

津下 あまり接する機会がなくて、ほとんど記憶に残っていませんね。先生方では、中島重先生から憲法を習いました。当時はやりの天皇機関説だった。それから、私が入学してから住谷悦治先生が同志社へ来られた。

——住谷先生からは何を？

津下 経済学でした。いや、社会学だったか。個人的に非常に親しくしていたので、よくお家へ遊びに行きました。山本宣治先生に性教育を教わったな。

——予科のときですね。

津下 そう。面白いものだから、皆なかなか出席がいいんだ。(笑)

——生物を教えておられたはずですね。

一年間ずつと性教育ですか。

津下 そういうわけではなかったが、学生たちが面白がってね。ほかにも習った先生はいろいろいるけど、私は授業よりもグリーククラブに熱心だったから。(笑)

#### 女学校時代の満寿子夫人

夫人 私は女学校にしまして、海老名先生が毎週礼拝の時間にお話に来て下さって、大変感銘を受けました。海老名先生の時間というのがあって……。山室軍平先生とか有名な方が同志社へ来られると、礼拝の時間にご紹介されて、そういう先生方のお話も聞かせていただけましたし、他の学校では得られないものを、私たちは礼拝で得たのです。

——同志社教育のよさは礼拝にあったと。

夫人 そう思います。それくらい礼拝の時間、礼拝堂は貴重なものでした。もしあの礼拝堂が同志社になかったら、それは大変なことだったと思います。いまはずいぶん変ってきたようですけれども。

——それは大学生で、それ以外の学校ではきちんと守られています。ただ、出席の心構えとなると、どうかと思います。奥さんは何年に同志社女学校へお入りになられたんですか。

夫人 大正八年に入学して、十三年に卒業しました。それから専門部の英文科にしばらく籍を置いていましたけれども、中退してアメリカへ行きました。だから私が同志社の二年生ころから海老名総長の時代ですから、毎週礼拝の時間に先生のお話をうかがいました。

——津下さんのころは、大学にも礼拝の時間があったんでしょう。いまも毎週水曜日の二講時目にチャペル・アワーがあります。

津下 それはありました。旧神学館（クラク記念館）の二階の講堂で。

——出席はどうでしたか。

津下 どうだったか、よく覚えていません。

夫人 真面目に出る学生じゃなかったんじゃない？(笑)

津下 そうでもなかったが。

夫人 この玉川学園はキリスト教主義をうたっている学校ではないんですけれども、小学生から大学生にいたるまで週一回の礼拝は全員出席しています。宗教教育とか精神教育、人間形成に資するための教育が、とてもいきとどいて行われているんです。ほんとに羨しいくらい。同志社もあのようであってほしいと思いますね。

——小原先生の教育方針でしょうか。

夫人 そうなんです、それをいまもきちんと守っています。

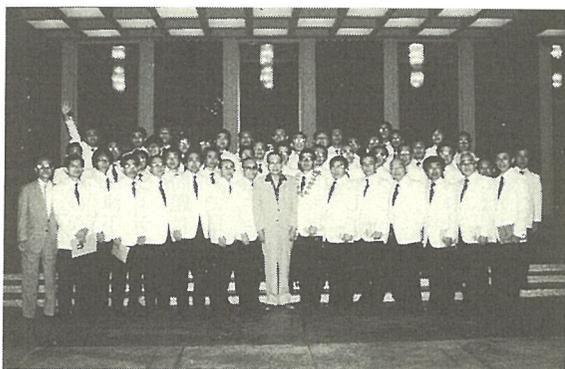
津下 確かに玉川はいきとどいた教育をやっていますよ。

——さっき一万人とおっしゃいましたが、学生生徒の数も関係があるでしょうね。同志社は大学生だけで二万人、全校あわせると三万人を超えていますから。

津下 その問題はありますね。

——奥さんは代々同志社理事のお家でお育ちですから、同志社とは特別の関係がありですね。津下さんもお父さんと二代にわたって理事ですが。

夫人 同志社騒動がございましたでしょう。



ハワイ大学との交歓（中央が津下統一郎氏）

——原田助総長の時代の……。

夫人 そうそう、あの騒動のことが頭に焼きついております。

——でも、小さい頃のことでしょう。

夫人 そうなんですけど、父が理事だものですから、学生さんが毎日のように押しかけて来まして。

——原田を辞めさせるな、という運動でしようか。

夫人 話の内容まではわかりませんでしたが、父は原田先生を擁護していました。

その後も総長反対の人たちがよくこられるので、とても困っていたようでした。それから、辞めて行かれる方たちをいつもかばっていたようでした。

——じゃあ、両派の人や学生たちが来たんですね。

夫人 そのようでした。それから中村栄助さんもよくみえましたね。

——お爺さんの大沢善助さんとは、新島先生時代からの仲間ですね。

夫人 そうなんですけど、そのときは父の徳太郎が理事でしたから、家へ来られるとよく父と相談しておられました。

——中村栄助さんが相談にいらつしやるというのわかりますが、学生までが押しかけて来たのは大変ですね。

夫人 そうしたことが、子供ごころに強く印象に残っています。

### 実業界と国際主義

——津下さんは大学を卒業されると三井物産へ就職なさったようですね。お父さんが実業界におられたから、ご自身も実業界へ入ってというお考えだったんだらうと思えますが、ニューヨーク支店にご勤務だったとうかがっていますけれども……。

津下 最初は名古屋です。同志社出身の小林さんが当時、三井物産の常務をしておられて、その小林さんご紹介で就職できました。大正十五年に卒業して、昭和五年まで名古屋にいました。それからニューヨークへ行つたわけです。そして八年ほどいました。

——ずっとニューヨークに。

津下 そうです。

——そのときのお仕事の内容はこれ（安岡重明「昭和期・解散前の三井物産」津下統一郎氏との対談、『同志社商学』第三七卷三号）に書かれているようですから後で拝見させていただくとして、外地にいる日本人は、仕事の関係で外国人と折衝す

るといつたことを除いて、ほとんど日本人としかつきあわない、だから何年いても外国人のなかにとけこめないということを聞かされるんですが。津下さんの時代と現在では随分ちがうでしょうが。

津下 そういう問題は確かにあります、日本人ばかりが集って日本人のクラブで飲むとか。それで私はニューヨークから列車で一時間ばかり通勤にかかるマロネットとかホワイトブレーションとか、アメリカ人しかいない町に住みましてね、ほとんど外国人ばかりとつきあっていました。郷に入れば郷に従えてね。

——そうでなきゃ本当の国際人にはなれないですね。奥さんはニューヨークで早くに留学生生活をなさったようだし慣れていらっしやる。

夫人 同社社でデントン先生はさまざまな分野の方を昼食などにお招きして、いろんなお話を聞かれ、交流なさっていました。ああいうことを私たちアメリカでしましたし、またしていただきましてね。いま思うと、それが私たちの人間形成に大きいプラスになりましたし、楽しゅうございました。

——長く外地にいると子供の教育が問題になるようですね、その国の教育をずっと受けさせるか、やはり日本の教育を受けさせるか。

津下 そうです。私はその国の教育を受けさせたいという考えだが。

夫人 でも十三歳を超えると、それから日本へ帰って日本の教育を受けさせるとなると、ずっと日本で生活していた子供たちになかなか追いつけないですよ。そのへんが難しい。

——いわゆる帰国子女の教育問題ですね。

夫人 現在は日本人学校がありますので、孫たちは日曜日だけその日本人学校へ行っていたようです。十七歳と十四歳で帰国しましたが、大成功でした。

——奥さんはガールスカウトをやつておられたとうかがいましたが。

夫人 はい、でも今はガールスカウト日本連盟の顧問です。一時は会長もしていました。それから、世界連盟のアジア太平洋委員を九年いたしました。今は世界連盟の名誉委員になっています。また、日米婦

人会の会長もさせていただきました。

### 同社への期待

——ご主人以上に国際人でいらっしやる。津下さんは戦後、三井物産が解散して以後、東京紙器とか千代田紙業など、主として紙関係の会社の経営者として実業界におられたようですが、外国生活そのほかいろいろご経験なさつて、同社社の理事も永年おつとめいただいて、いま、同社社についてどうお考えでしょうか。

津下 やはり国際社会で働ける人物を育ててほしいですね。

夫人 私どもがこうしてやってこられたのは、同社社教育のおかげだと思つています。

津下 それから田辺キャンパスね。

——はい。

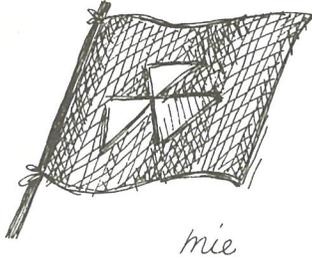
津下 あれは立派なキャンパスです。都会から離れていて遊ぶ場所が周囲にな。町田市の玉川学園がそうなんだが、ああいう場所ですね、私は新島精神というものをうんとたたきこんでもらいたいと思いま

すね。同志社も規模が大きくなって独自のカラーがなくなってきた。だからあのキャンパスをうまく活用して、同志社独自のカラーをつくり出すような教育をしていただきたいですね。

——どうやって独自のカラーをつくるか、これは非常に大きい課題だと思います。長時間ありがとうございます。

〔津下統一郎編「津下紋太郎自伝」玉川学園出版部昭和五十七年七月、参照〕

（一九九〇年二月一七日、町田市の津下邸で収録）



## 『同志社百年史』について

「通史編」（全三巻）

同志社百年の歴史を五つに時代区分し、次の五部から成っている。

第一部 創業と成育（明治前半期）  
 第二部 キリスト教教育の受難（明治後半期）

第三部 大学への道（大正期）

第四部 戦時下の学府（昭和前半期）

第五部 再生と発展（昭和後半期）

上野直蔵総長は「通史編」の「序」で、「同志社における徳育の基礎であるキリスト教は、それがキリスト教たるがゆえに、少なくとも一九四五年にいたるまで国粹的権威筋から胡乱な目でみられ、疑問視され、敵視されてきた。（中略）同志社を護るための先人たちのすさまじいまでの攻防は、まさに一つのドラマであり、読むものをして緊張と畏怖の念を起させるであろう。この書は同志社の犯した数々の失敗や恥辱の部分をも隠すことなく記している。」と述べておられる。ラットランドのグレイス教会における新島襄の、学校設立に関する訴えを起点とする「通史編」は、確かに、キリスト教主義をめぐる同志社の攻防を軸に展

開されているといえよう。もちろん同志社の諸制度や諸学校の変遷、そこで生きた学生生徒を含む諸先輩の動向などは、それぞれ独自に、読者に訴えるものをもつはずである。

「資料編」（全三巻）

「通史編」の叙述に用いられた基礎資料およびそれに関連のあるものを中心に編纂されている。同志社開業関係にはじまり一九七五年度までの主要な資料を収録、原資料による同志社百年史といつてよく、それ自体自立性をもっている。収録資料三五〇点、従来活字になっていなかったもの、すなわち未公開資料が数多く含まれており、読者は同志社史の新しい一面を見出すであろう。研究者の期待にも応えうるものである。詳しい同志社年表を添えてある。

「通史編」一、六五八ページ。

掲載写真 三二五点。

頒価・六〇〇〇円（送料五二〇円）

「資料編」二、一九二ページ。

頒価・二二〇〇〇円（送料八三〇円）

発行・学校法人同志社  
 取扱・同志社収益事業課

（☎〇七五―二五一―三〇三八）